亀岡盆地の縄文土器

柴　　暁彦

1　はじめに

亀岡盆地は、南丹波地方の最南端に位置する。この盆地中央には大堰川が東流し、盆地を大きく二分する。この盆地は砂岩、頁岩で構成される秩父古生層を基盤とし、盆地西側には、中生代末期に貫入した花崗岩が見られる。以上のような岩帯からなる構造盆地であり盆地東端の北西から南東につづく山地と平地の境界には、亀岡断層が残る。盆地周辺では、古くは旧石器時代から生活の痕跡がうかがえる。この時代にはナイフ型石器や有舌尖頭器が出土した、曽我部町南条遺跡と篠町西長尾遺跡A地点遺跡がある[1]。

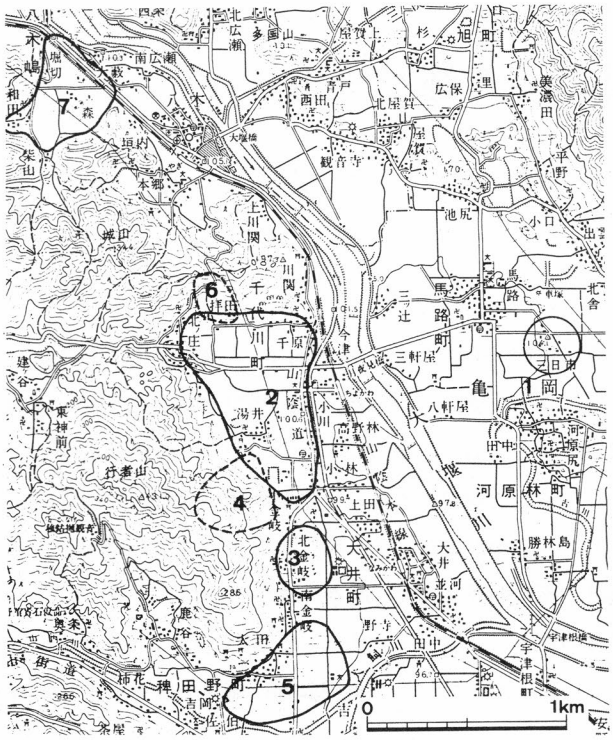
縄文時代の遺跡は少ないが、遺構の埋土、包含層より出土したものを中心に数遺跡が確認されている。本稿では、現在までに明らかになった、亀岡盆地の縄文土器を出土した遺跡を集成する。

2　遺跡と遺物について

縄文時代の遺跡は、後期・晩期のものを中心として以前から知られているものには、後期の馬路町三日市遺跡がある。当遺跡は、大堰川左岸の河岸段丘上に位置する。その他、国道9号バイパス関係の調査で確認された千代川遺跡、北金岐遺跡、太田遺跡、また1990年度発掘調査が行われている、船井郡八木町の八木嶋遺跡においても縄文土器や石器が出土している。その他、小金岐古墳群下層と墳丘より磨製石斧3点、拝田8号墳の墳丘から打製石鏃1点、石錘1点、磨製石斧1点が出土している。亀岡盆地では縄文時代の遺物は遺構に伴うものではなく、包含層あるいは弥生時代以降の遺構埋土からの出土がほとんどである。次に個々の遺跡について概要を述べる。

三日市遺跡　当遺跡は、大堰川左岸の河岸段丘上に位置する。1979年の御上人林廃寺の調査に関連して周辺遺跡の踏査を行なった際に三日市廃寺の近辺で縄文土器が出土したことにより確認された遺跡である。出土した土器は、いずれも沈線文系のものであり、縄文時代後期に比定する[2](第2図)。

千代川遺跡　亀岡盆地の北西部に位置し、盆地を二分する大堰川の西岸、行者山より北東へ緩やかにのびる丘陵や微高地上に位置する、千代川町全域に広がる弥生時代から平安



第１図　縄文時代遺物出土遺跡

１．三日市遺跡　２．千代川遺跡　３．北金岐遺跡
４．小金岐古墳群　５．太田遺跡　６．拝田古墳群
７．八木嶋遺跡

時代にかけての複合集落遺跡である。過去に亀岡市教育委員会、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって発掘調査が行われている。その中で、第２次、第９次、第11次、第13次、第16次の調査において、縄文土器等の遺物が出土している。しかし、縄文時代の遺構からの出土ではなく、包含層からの出土が大半である。

第２次調査では、弥生時代の住居跡や平安時代の溝状遺構などが確認されている。縄文時代の遺構は確認されなかったものの包含層中より縄文時代後期の土器が確認されている。これらは磨消縄文系、条痕文系、無文系のものである。[3]

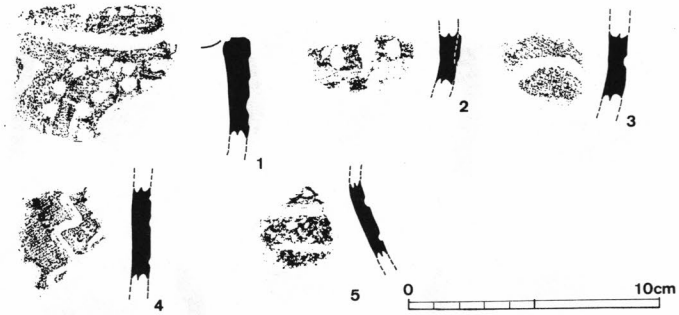
第９次調査では、１点であるが、縄文時代晩期の突帯文土器の口縁部片が包含層中より出土している。[4]

第11次調査では縄文時代後期・晩期の溝や、古墳時代の溝、土坑等が確認されている。亀岡盆地では、縄文時代の明確な遺構に伴う縄文土器の出土はあまり例がない。この土器の確認されたのはSD06・SD14である。大半が晩期の突帯文土器であり、その他後期の条痕文系、沈線文系、磨消縄文系のものが含まれる[5](第３～５図)。

突帯を持つものは深鉢であり、突帯の貼り付け方とその形状でそれぞれ細分している。前者は、口縁端部に接して、あるいは、やや下がった位置に突帯が付くかによって大きく分けている。また後者では、突帯の断面の形状、すなわち、断面が▷形になるもの、◺形になるもの、かまぼこ形になるもの、平板な形になるもの、台形になるもの、◸形になるものの６つに分けている。また、突帯の刻み目の形状についても触れている。それらは、D字形・O字形・C字形・小さな刻み目の連続するもの等がある。これらの突帯文土器は、

船橋～長原式に併行するだろう。

27は口縁部下内面に一条の沈線を施し、端部と沈線の間に刻み目を施す浅鉢である。元住吉山Ⅰ式ないしⅡ式に併行すると思われる。32は三叉文による区画内に縄文を施す浅鉢である。東北・北陸系の土器の影響を受けていると思われ、御経塚Ⅲ式(大洞B式)に併行すると思われるものである。34は外面に巻貝の頂部を下にして押圧した扇状圧痕と凹線を施した土器である。凹線文系の宮滝式に比定する。35は山形の沈線文を施した浅鉢で、晩期前半になると思われる。31・39・40は奈良県の橿原遺跡に類例の見られるものである。31は横方向の沈線の区画に刻み目及び山形沈線を施す。いずれも晩期に比定する。55・56は肥厚した口縁端部に3本1組の工具による刺突をしている。60は沈線間に弧状の沈線を描いている深鉢の頸部で、和歌山県の鷹島遺跡に類例がみられる。晩期前半でも古い段階に属する。



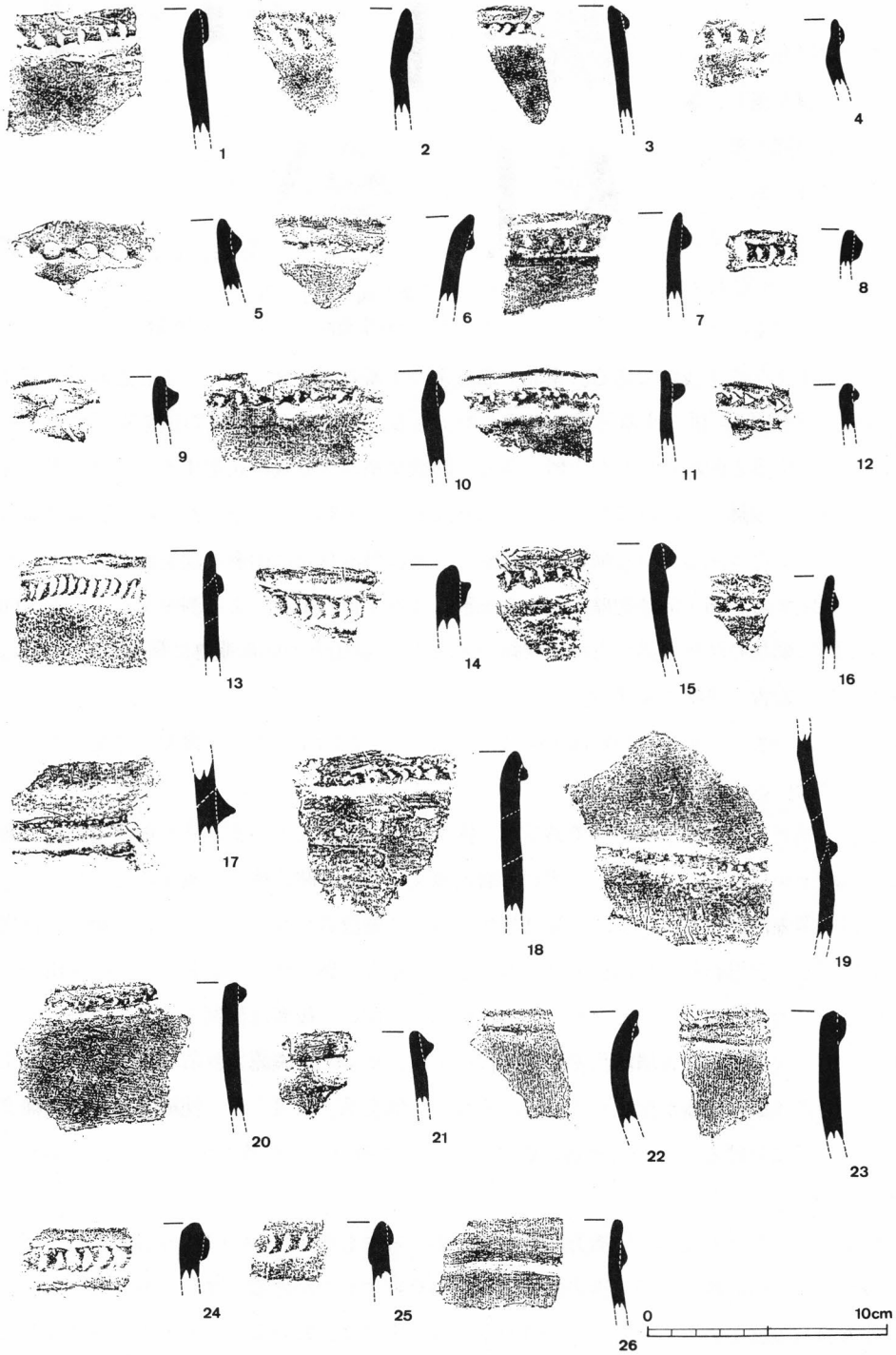
第2図　出土土器拓影
1～4．三日市遺跡　　5．八木嶋遺跡

しかし、いずれの破片も口縁部・胴部・底部といった断片が多く、器形全体をうかがえるものはない。

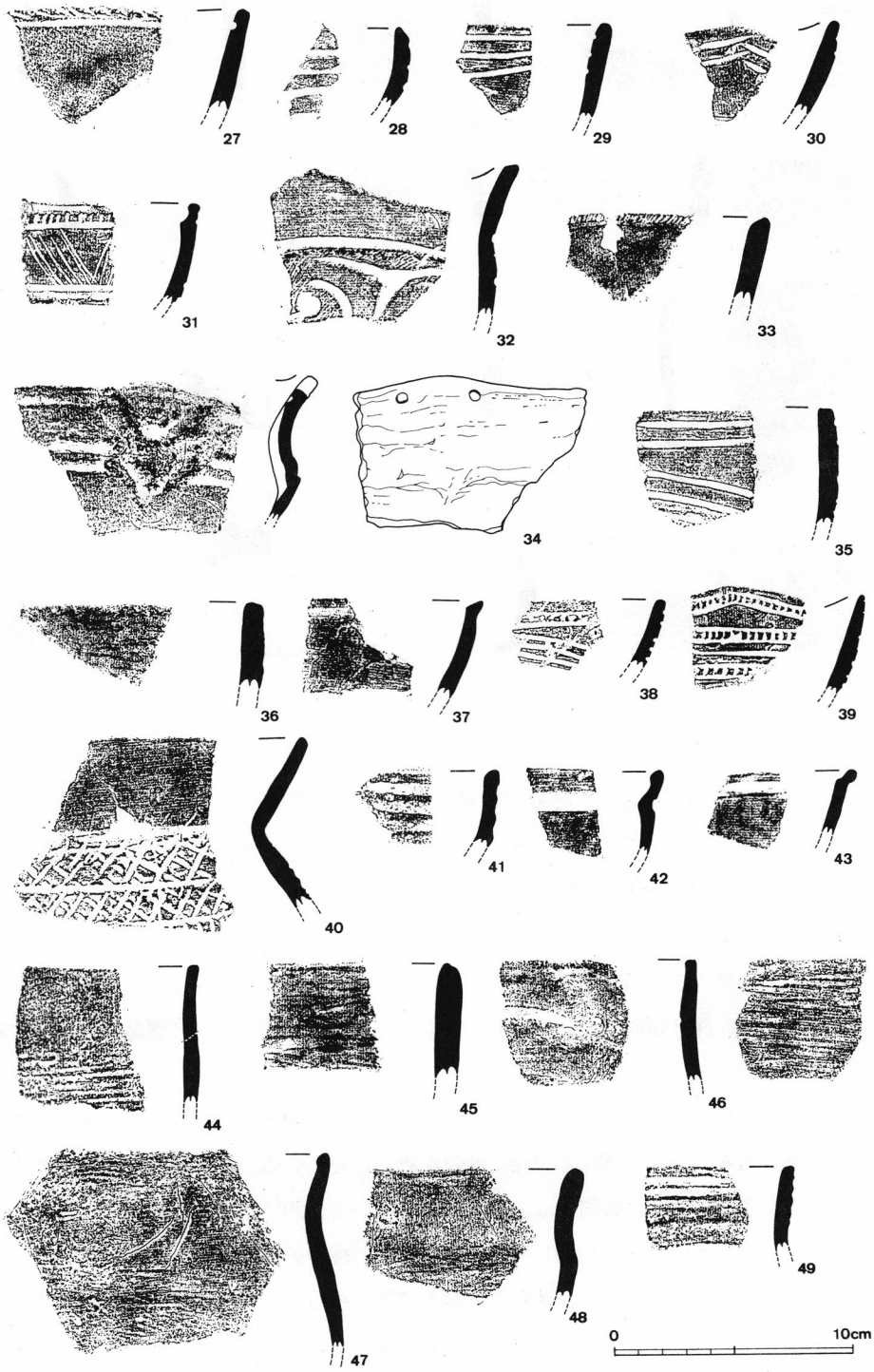
第12次調査では、ごくわずかであるが、縄文土器が出土している。それらは遺物包含層及び溝埋土からのものである。いずれも磨消縄文系で縄文時代後期に属すると思われる。[6]

第13次調査においては、やはり縄文時代の遺構は確認されなかったが、包含層より縄文時代早期後半と思われる楕円押型文土器の胴部破片と、鉢の把手と思われるものが出土している。前者は磨滅しているために詳細は確認できない。後者は後期のものと思われる。[7]また、第16次調査では古墳時代や奈良時代の土坑、ピットが確認されるなか、包含層中より縄文時代後期の土器が出土している。それらは無文系、条痕文系、沈線文系、磨消縄文系、縄文系に分けることができる。数の上から無文系のものが多く出土している(第6～9図)。

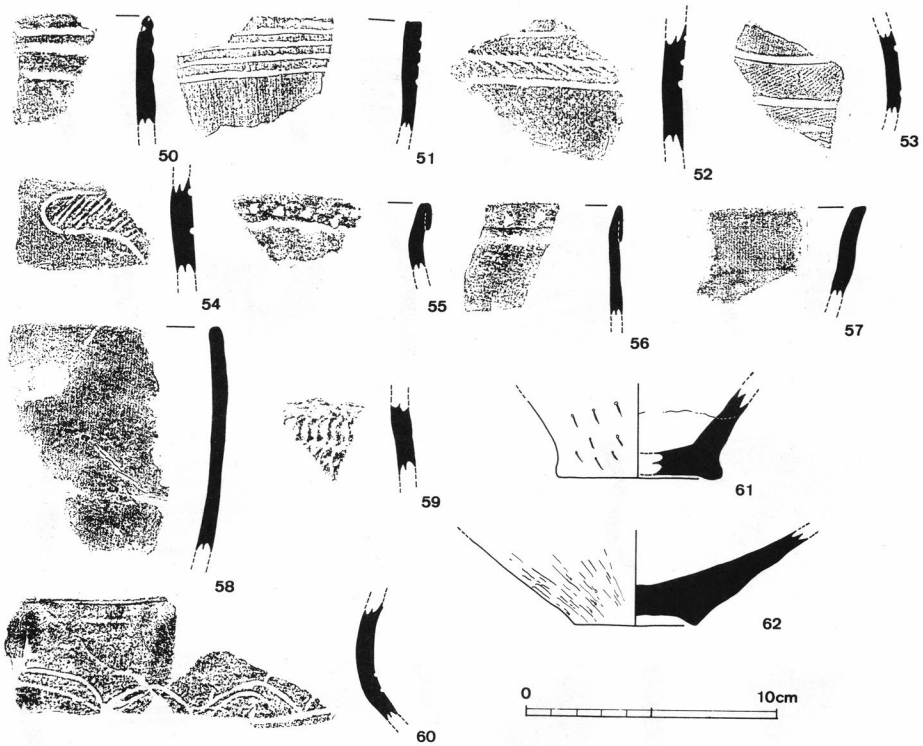
条痕文系の土器は外面のみに横方向の条痕をめぐらすもの(1～4・11・14)と、12・16・18のように外面に縦・内面に横方向の条痕をめぐらすものがある。また、外面縦・内面に斜め方向の条痕をめぐらすもの(6・12)もある。中には、22のように6本1単位の工具で縦方向の条痕をめぐらせたものもある。



第３図　千代川遺跡第11次出土土器（１）



第４図　千代川遺跡第11次出土土器（２）



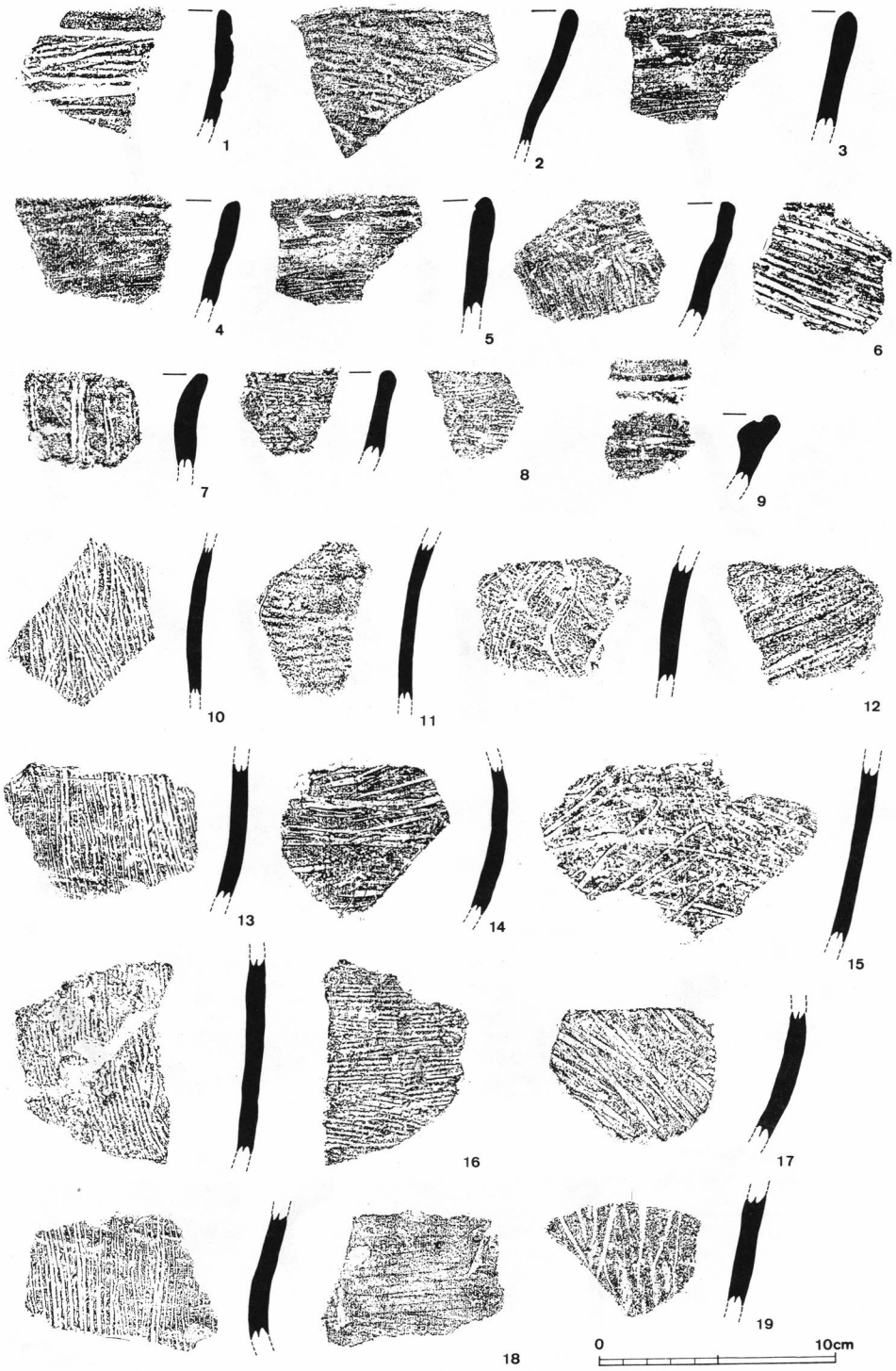
第５図　千代川遺跡第11次出土土器(３)

25は、口唇部に縄文を施し、さらに口縁端部からLRの縄文を施している。28は体部を「く」の字形に屈曲させて立ち上がり、口縁端部を尖らせている。そして、屈曲部分を境にして上部をLR、下部はRLの縄文を施している。

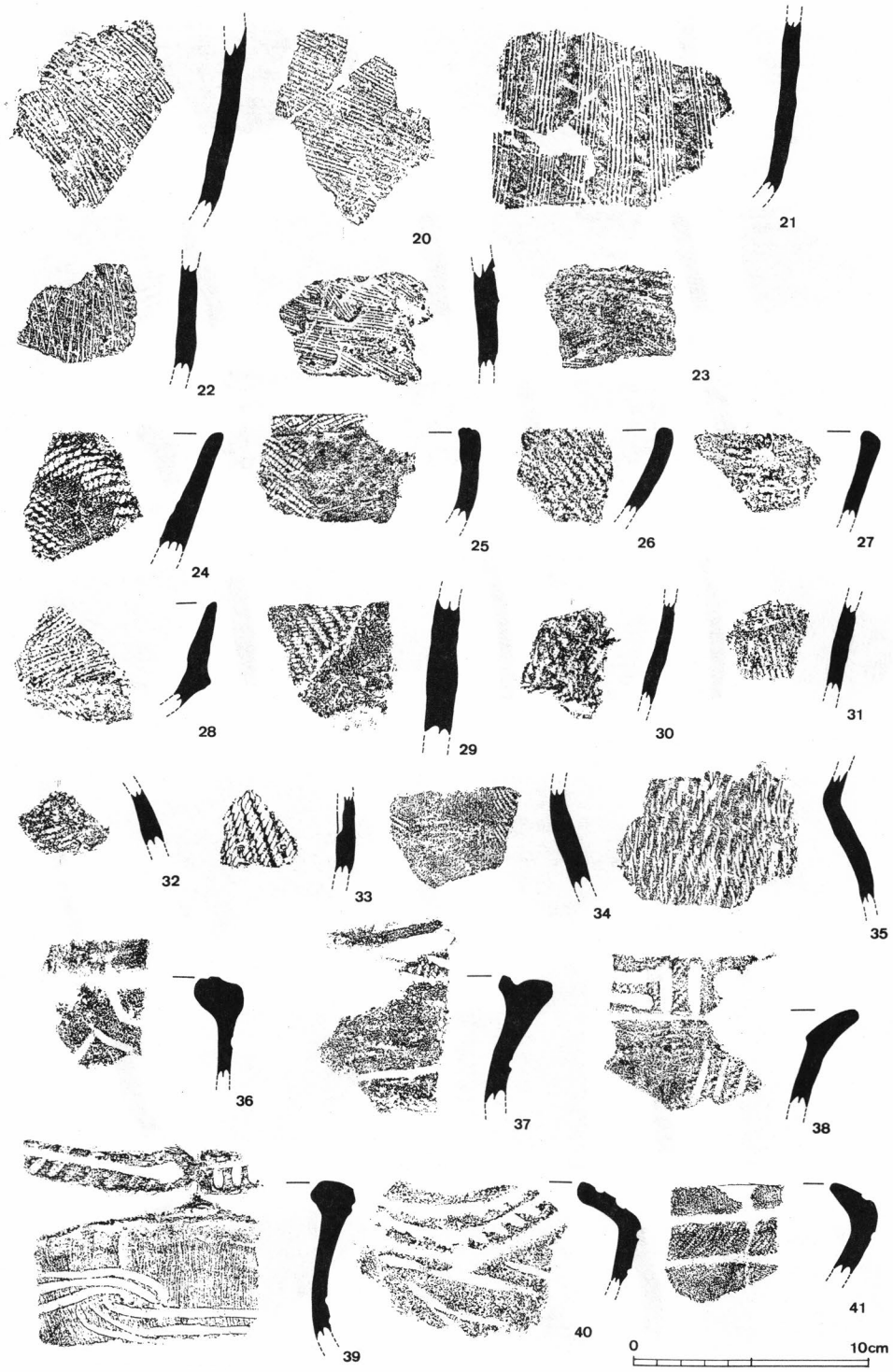
磨消縄文系の52～68は、口縁部からやや下がったところに磨消縄文を施してあり、これらは中津式に相当するものと思われる。

35は、縄文地の深鉢頸部の破片である。中期初頭の船元Ⅰ式あるいは鷹島式に比定すると思われる。

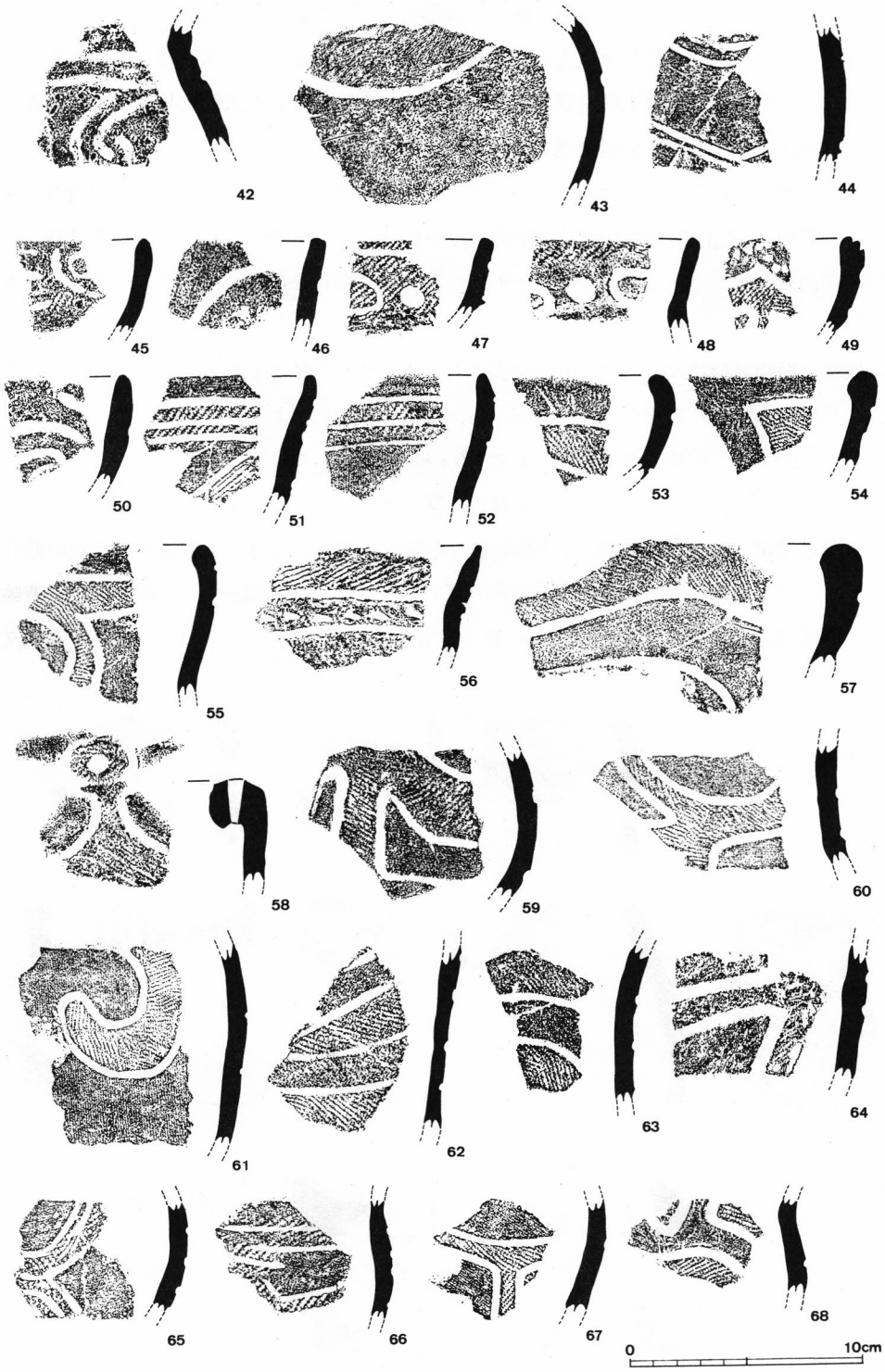
36・37・39～41は、口縁部が「く」の字状を呈し、その肥厚した口縁部に文様を有する縁帯文土器である。36は口唇部と頸部に沈線をめぐらせている。37は口唇部と頸部に沈線をめぐらせ、沈線外側の口唇部には、縄文を施している。39は肥厚した口唇部に刻み目を施し、その上から太めの沈線を配している。外面は、縦の条痕調整の上に３本１組の絡み合う沈線を配している。これは、縁帯文土器の初期の段階に属し、桑飼下遺跡の第２群と同じ福田KⅡ式に比定すると思われる。鳥取県島遺跡に類例がみられる。41は２条の沈線間に縄文を施している。桑飼下遺跡の磨消縄文系鉢Bになると思われる。45は縄文地に沈



第６図　千代川遺跡第16次出土土器（１）



第７図　千代川遺跡第16次出土土器（２）



第８図　千代川遺跡第16次出土土器（３）

線を配したもので、縁帯文土器の「縄手」段階のものと思われる。38は、口縁内側を肥厚し地文に縄文を施し、その上に太めの沈線をめぐらせている。外側も同様に縄文を施し、沈線を引いている。この土器も縁帯文土器であり、鳥取県の布勢遺跡に類例がみられる。

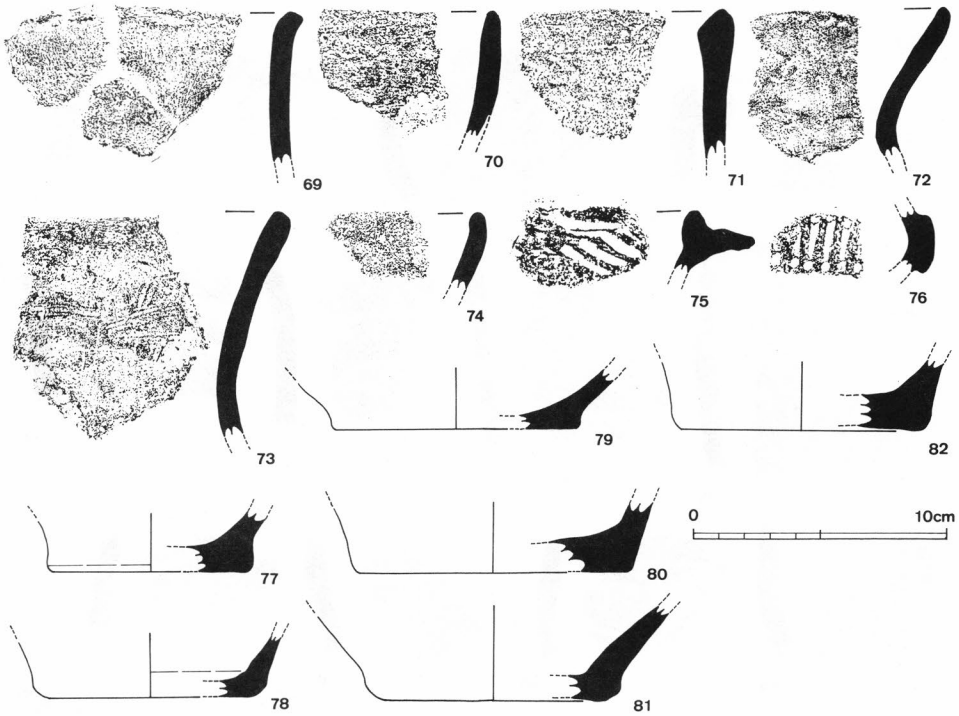
51は桑飼下遺跡の第4群磨消縄文深鉢Iに類例が認められる。

無文土器の口縁部の形状は、口縁端部のみわずかに外反させるもの(69)、やや内湾させるもの(70)、「く」の字状に大きく外反させるもの(72)、緩やかに外反するもの(73)、口縁端部内側を肥厚させるもの(71)、そして、74のように口縁端部のみ内湾させるものがある。

底部の断面の形状は、底径よりやや張りだしてわずかな稜をつくり、少し内湾させたのち、外反するもの(77・78・81)、底部からほぼ真っすぐに立ち上がり外反するもの(80)、底部からわずかに内湾して外反するもの(79・82)がある。

しかし、すべて破片資料であり、全体形を窺い知れるものはない(第6～9図)。

北金岐遺跡　亀岡盆地の西方、標高431mを測る行者山から緩やかに延びる舌状の微高地に立地する遺跡である。国道9号バイパスの建設に伴う発掘調査により確認された遺跡で、弥生時代から鎌倉～室町時代にいたる複合遺跡となっている。SD01の埋土より縄文



第9図　千代川遺跡第16次出土土器(4)

晩期の突帯文土器が出土している。土器は胎土の上から大きく在地のものと搬入品に分けられる。器種は深鉢及び壺形土器で構成される。[8]

太田遺跡　当遺跡は亀岡盆地のほぼ中央に位置し、北寄りの山間部をのぞいては平地に立地する。この場所は扇状地上に位置し、犬飼川等の浸食による舌状微高地に位置している。この遺跡は弥生時代の遺構が大半である。縄文土器は包含層及びSD0207から出土しており、後期の磨消縄文系、晩期の突帯文土器である。[9]

八木嶋遺跡　国道９号バイパスの建設に伴う発掘調査であり、平成元年度に用地内の試掘調査を実施し、翌２年度に遺構密度の高かった部分について本調査を実施している。遺構の中心は古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物群、古墳時代のしがらみ状遺構や鎌倉時代の墓などが確認されている。この中で奈良時代の溝と思われる溝の埋土から縄文時代後期の磨消縄文系の土器が１点出土している。この土器は、胴部の破片であり、２条の沈線の間をRLの縄文を施している。胎土には、石英・チャート・雲母等を含んでいる。色調は赤褐色を呈しており、かなりもろくなっている(第２図)。

3　まとめにかえて　―千代川遺跡出土の縄文土器について―

縄文土器の出土の少ない亀岡盆地にあって、比較的まとまった資料である第11次及び第16次調査出土の土器は、中期から晩期までとかなりの時間幅をもっている。しかし一概に千代川遺跡の出土土器といっても国道９号バイパスの建設用地内を広範囲にとらえており、縄文土器を出土した調査地を一連のものとしてとらえることは、土器のうえからも無理があり、調査次数ごとに分けて考えるほうがよいだろう。第11次調査の資料については、爪形文を施す鷹島式と思われる破片(59)が１点あり、後期においては元住吉山Ⅰ式あるいはⅡ式に併行すると思われる浅鉢や巻貝の扇状圧痕をもつ宮滝式の土器もみられる。また晩期においても前葉から後葉にいたるまでの幅広い土器がある。前葉に位置付けられるものは、外面に山形沈線を施す浅鉢の口縁部破片(31)や、60の深鉢の頸部破片と思われるものがある。後者は滋賀里式に比定できる。また、奈良県の橿原遺跡に類例のみられるもの(31・39・40)もある。32は大洞B式の影響を受けるものである。突帯文土器は船橋・長原式に比定すると思われる。おそらくこの地点においては中期と思われる土器は１点なので、少なくとも後期後葉から晩期後葉の間は、継続して生活が営まれたものと思われる。一方、第16次調査の出土資料は、後期中葉に位置付けられるものが多い。中期の資料(35)は１点であるが、船元Ⅰ式ないし鷹島式に比定できると思われる。磨消縄文系の土器は、近畿地方で一般的にみられる中津式の土器である。また、縁帯文系の土器は、縁帯文土器の初期段階いわゆる福田KⅡ式のものもみられる。39がそれに該当する。また縄手段階のものも

ある。38・39は山陰の土器の影響を受けている。

以上の第11次及び第16次調査の資料によって、亀岡盆地の縄文時代後・晩期の土器の様相は中津式から船橋・長原式への変遷として型式編年上ではつながりをもった。しかし、これらは後期前葉から晩期後葉まで集落が存在していた可能性を実証したにすぎず、実際には、集落の存在を裏付けする住居跡など集落を単位とする遺構は発見されていない。これについては、今後の資料の蓄積を待たねばならない。

なお、本文挿図に関しては亀岡市文化資料館の中澤勝氏、当調査研究センターの竹原一彦調査員の指導、教示を得て、筆者が実測、整図した。本稿については奈良県立橿原考古学研究所の松田真一氏に原稿の校閲ならびにご指導をいただいた。末筆ながら感謝の意を表します。

（しば・あきひこ＝当センター）

1　京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第3分冊［第2版］　1986
2　亀岡市教育委員会『御上人林廃寺第5次発掘調査報告書』(『亀岡市文化財調査報告書』第10集)1980
3　水谷寿克ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要　千代川遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982
4　森下衛「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要　千代川遺跡第9次」(『京都府遺跡調査概報』第17冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
5　「千代川遺跡第11次発掘調査概報」(『亀岡市文化財調査報告書』第15集　亀岡市教育委員会)　1987
6　森下衛「昭和61年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要　千代川遺跡第12次」(『京都府遺跡調査概報』第26冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987
7　鵜島三壽「昭和62年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要　千代川遺跡第13次」(『京都府遺跡調査概報』第31冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988
8　石井清司・田代弘ほか「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
9　村尾政人・田代弘ほか「太田遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第6冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

〈参考文献〉
小林達雄ほか『縄文文化の研究』4縄文土器Ⅱ　雄山閣　1981
渡辺誠『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』　平安博物館　1975
末永雅雄『橿原』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第17冊　奈良県教育委員会)　1961
亀井熙人ほか『鳥取県東伯郡北条町島遺跡発掘調査報告書』第1集　北条町教育委員会　1983
千葉豊「縁帯文土器系群の成立と展開―西日本縄文後期前半期の地域相―」(『史林』第72巻第6号　京都大学文学部内史学研究会編)　1989